

別冊

沖繩に散ったある一期生の戦記



第7号

〒102 (新)
東京都千代田区九段南
4-3-7 勸借行社内
特攻隊慰霊顕彰会
特攻平和観音奉賛会
電話 03 (263) 0851
編集人 最上 貞雄
発行人

沖繩に散ったある一期生の戦記

特操一期 田 淵 鷹 夫

あの苛烈な大戦末期にペンを操縦桿に代えて奮闘し祖国のために散華された数多い同期生のためにも、吾等の闘いのあとは埋没されなくてはならないと思います。

学鷲の先輩として特操一期の後輩四機を沖繩上空まで誘導し夕陽迫る慶良間湾上の米艦船に見事突入に成功させた、飛行二六戦隊付坂本隆茂中尉がいた。

坂本中尉が、この特攻攻撃のすべてを詳細に記録された「沖繩特攻」の一文ほど私の心を打ったものではありません。読むうちに、万感胸に迫り、涙に文字がかすむのも度々でした。同期の四名の凄絶なまでの戦いを知り、そこに真の学鷲、特操一期生の姿を見た思いがしました。

坂本さんは復員後、あらゆる手づるを求めて四人の遺族を探しあて、それぞれのご遺族を訪問し、見事な最後を伝えるとともに墓前に額づかれたとのことです。編集委員会と坂本さんのご厚意によりこの一文を掲載していただくことになりました。心から感謝いたします。

なお散華された戦友は次の四名です。

誠二六戦隊 昭和二十年五月十七日慶良間列島東方

稲葉 久光殿 今野 静殿
白石 忠夫殿 辻 俊作殿

合 掌

坂本隆茂氏は神戸商業大学在学中は学生航空連盟に所属され、昭和十六年十二月繰り上げ卒業、第七期操縦候補生として軍籍に入り飛行二六隊に所属しニューギニア、フィリッピンを転戦、台湾花蓮港において終戦を迎えられました。

沖 繩 特 攻

坂 本 隆 茂

あわれ 出立

「只今より、坂本編隊沖繩攻撃に出発、目標、慶良間列島の敵艦船群。突入時刻十九時三十分、終り」。

特攻隊員四名と私は、二列に並んで申告終るや否や一斉に敬礼を行った。

最後の挨拶である。

「うん。すっかり頼む」。部隊長の声は短かった。

傍には参謀が、感慨深く見つめている。

部隊全員のまなざしが、すべて私達にそそがれているのを頬に感じた。

とうとう来る所迄来てしまった。

もう何もかも、どうすることも出来ない。

私達は行くのみである。

昭和二十年五月十七日、午後四時。

台湾は東海岸、花蓮港飛行場のお粗末な戦闘指揮所の前である。

ジリジリと灼けつくような南方特有の日射しが照りつけ、風はそよともしない。

湯呑茶碗が我々の手に渡された。

参謀が持参して来た司令官心づくしの清酒は、部隊長の手で注がれた。乾盃。

「御成功を祈る」。

誰の口からか、ぼつりと洩れた。

成功？ 成功？ 私は胸がしめつけられた。

こんな惨酷な門出があるうか。

何ときびしい戦の世界か。

往く者、送る者、それぞれ割り切れぬ思いを胸に秘めている。

部隊長、参謀等、次々と手を握りしめてくれる。

だが、もう何の感慨も湧かない。

私は体ばかりでなく心までが、唯機械的に動いているに過ぎないようだ。

抵抗しようもない怒濤にもまれながら、どこかへ押し流されている。そういう状態であった。

考えるゆとりもない。

心の救いを求める努力も湧かない。

いよいよどたん場へ来たと思う放心に支配されていた。

やがて飛行場は轟々たるエンジンの爆音につつまれ始めた。

離陸前に行う試運転の音、整備員が今や心をこめて調整をしている。

ふと我にかえた。

任務完遂迄は何とか無事飛んでくれと心に念ずる。元々我々飛行第二六戦隊は軽爆撃機の専門部隊、殊に降下爆撃はお家芸であった。

大東亜戦争の発足と同時に、満州の白城子で編成され、緒戦以来南方に進攻して作戦に従事して来た。

当初はノモンハン時代の九七式軽爆を未だ使われ、とても米軍とともに太刀打ち出来るしろものではなかったが、比島の治安作戦等には結構役に立った。

その後ソロモン、ニューギニア方面へ転進する頃、漸く九九式軽爆撃機に変えてもらったものの、その時は既に戦場の制空権は、完全に米軍に掌握されて、このような飛行機では手も足も出なくなつて、部隊は消耗してしまつた。

最後はとうとう戦闘機をあてがわれた。

一式戦闘機「隼」である。

開戦以来の激しい消耗戦で日本の戦闘機操縦者は、またたく間に激減した。

窮余の一策として我々のような専門外の部隊に「隼」を与えて、泥縄式訓練が行われた。

パレンバンで英国機動部隊を撃退した迄はよかったが、比島のレイテで二度目の全滅をくらつた。

昭和十九年十二月、レイテ生き残りは内地で戦力恢復を命ぜられ、我々は明野で新部隊長を受け、兵員と飛行機の補充をしてもらつた。

三ヶ月の速成訓練で部隊主力はシンガポールへ発つていった。

私はまだ整備の終らない数機とともに、ゆっくり後続して来いと命じられたのも、新婚間もない私への部隊長の心やりであったろう。

私達後続部隊が出発したのは、桜もほころびる三月も終りであった。

明野から宮崎にとんで着陸してみると、そこには参謀が待ちうけ緊急命令を受けた。

沖繩の戦況が逼迫している。

南方に行く飛行機は全部無条件で台湾にいて、第四航空軍の傘下に入れ、沖繩を通つては危い。

お前は上海経由で台湾へ赴き、数日前に出発した中隊長と合流す

べしと言うのである。

正直な所嫌な気がした。シンガポールにゆけば、まだ余命はあるうと思っていたが、台湾とあらば沖縄攻撃である。最後は特攻に繰り出されるであろう。もうこの頃は戦争をやっている我々にも、戦局がすて鉢の段階に來ていることが、ひしひしと身に試みていた。

ペンを捨てて

予感半分当って半分はずれた。

なぜなら二ヶ月後の今、私は特攻隊員と一緒に沖縄に向って離陸しようとしている。

私自身に与えられた任務は、特攻四機を沖縄まで誘導し、且つ戦果を確認して帰還すべしである。体当りせよとの命令ではないから特攻隊員とは申せない。

だがこの頃の誘導機は九分九厘帰還していなかった。特別攻撃隊というものは、必らず護衛の戦闘機に護られて進攻し、体当りの戦果を確認してもらおうのが常道である。

沖縄作戦の初期の頃は、相次いで多数の特攻を進発させ、護衛戦闘機が上空を掩護していったが、米軍の物量には如何ともし難く、護衛部隊の大半は常に帰って來なかつた。

我が方の戦力は急速に低下し、掩護など、ぜいたくなことを言っておられない程息切れがして來た。

全くの丸腰で決死でなく必死であった。

今、私と共に出発しようとしている特攻隊四名は、いずれも師範学校を中途で放棄して軍籍に身を置かせられた、特別操縦見習士官出身の可愛い少尉ばかり、充分の訓練も受けていないが、早くより特攻要員として修業をさせられて來た。

かげながら随分悩んでいるらしい様子もあつたけれど、今や私のごときの及びもつかぬ明鏡止水の境地にあると見受けた。困を思う一途の赤心には全く頭が下る思いがした。

五名のうち割切れないのは私だけであつた。

技倆未熟の彼等は、飛び上るのがやつとのこと、長距離飛行など思ひもよらない。途中で私を失えば、目標一つない海上で進むことも帰ることも困難である。

私のようなものでも、信頼してついて來てくれるのだ。心の中で手を合せ拜んだ。

ガソリンは片道だけ

もし戦の世に奇蹟があれば、私は生還できるのだ。

唯、それを希うにはあまりにも状況はきびしかつた。目標の上空で被弾することがあれば、勿論私も体当りを敢行する位の覚悟はあつた。

否、その他に途はなかつたからだ。

だがこの場合は特攻四機の戦果を誰が確認してくれるのか。そして私自身の体当りすら誰も認めてくれないであろう。

愈々飛行機に搭乗しなければならぬ時間が迫つて來た。直立した四人の瞳が私の指示を待っている。

私は彼等の前に立つた。

そしてじつと見つめた。

緊張した顔ではあつたが、誰も恐怖を現わしていない。

若いながら何と立派な、と思いつつ私はこの世で与える最後の言葉に苦慮した。

作戦の打合せは既に済んでいる。

此の期に及んで何を言わなければならぬのか。
離陸した後は信頼し合う魂があるだけではないか。

それでも私は恰好をつけるため、ぐっと唾をのみこんで一息で
言ってしまった。

「絶対に俺を信じてついて来てくれ、それだけだ。終り」
「はいっ」

四人は一斉に答えてくれた。

私は彼等の一人一人とゆっくり力強く手を握りあった。

出動命令を受けて以来、朝から機械的に動いていた気持も、この
時初めて別離の悲壮が実感として湧いてきて、ぐっと胸につまっ
た。

私は落下傘をつけていたし、海上に不時着したとき浮くことの出
来る救命胴衣まで施されていたが、彼等はそのようなものは、全く
受けつけなかった。

その代り飛行帽の下には日の丸を染めぬいた鉢巻をしていた。

私は帰りの機上でしたためる夜食まで準備してもらっていたが、

彼等は私と一緒に宿屋で食べた早目の夕食が最後であった。

特攻機にはもちろん爆弾が吊りさげである。

あの軽い戦闘機に、よくも二五〇km爆弾を左右の翼に下げたもの
だと思った。……………その爆弾は機体から離れるようにはしてな
かった。

人も機体も爆弾と一体となって突入するのだ。

ただ、突入する直前に、座席にある針金を引いて、弾の先端の安
全装置を外しさえすれば、突入の瞬間作裂する仕組になっていた。

ガソリンは満載しても三時間程度、隼としては沖縄までが精一杯
であった。

更にまた特攻機には、無線機もなければ機関砲まで取りはずされ

て全くの丸腰であった。

敵の哨戒機に遭遇すれば万事休す、無念であるが致し方のないこ
とであった。

そればかりではない。特攻機の翼や胴体に描かれてあった日の丸
さえも、軍命により完全に塗りつぶされてあった。国籍不明機であ
る。

戦時国際法上からこれが許されるかどうかは私は知らない。

目標突入前に米軍哨戒機群の餌食にならないよう考えたものかと
思うが、軍首脳部の自棄的な作戦と思われてなさけなかった。

ついでにのランプ・アウト

誘導機である私の機体には、爆弾代りに魚雷型の増加タンクを取
りつけた。

二〇〇ℓ入り二本、ドラムカン二個分である。

これだけ燃料を増やして台湾・沖縄往復がどうやら可能であっ
た。

この燃料を使い果せば、用のすんだタンクはスピードの邪魔にな
るばかり、スイッチを押して海中に捨て去られる運命にあった。

私の機には無線機を搭載した。

戦果確認報告のためのものである。

会話は禁ぜられ、不得手なモールスでやらねばならない。そこで
対空無線班と打ち合せて簡単な符号をきめてお茶を濁すことにし
た。

もしまだ、私が自爆せねばならぬ時は、この無線機が、私の最後
を基地に知らせしてくれる一縷の望みはあるが、その頃の無線機能は
極度に低下して、とても期待はもてぬしるものであった。

※

試運転の終えた飛行場はもとの暑い静けさに戻った。飛行機はわれわれの乗組むのを待っていた。

出発を決意した。

「まわせ！」飛行機の方へ力一杯となりながら、右手を大きく円を描いて合図した。

五機一斉に始動。

われわれは始動車に飛乗り、見送りの人々に手をふりながらそれぞれの愛機のもとへかけつけた。

「異常なし」機付長は報告した。

「御苦労」愛機『ちくご』の操縦席に飛びこんだ私の眼と手足は、いつもの習慣通り機械的に点検をはじめていた。

エンジンの全力回転を終り、増加タンクのガソリンに切換た途端、異常を発見した。

燃料計がドロップするではないか。

一大事である。これは片道飛行しか出来ない。

「おい、駄目だ。一寸来てくれ」

機付長を呼んだ。機付長はプロペラの風をまともに受けながら翼を這い上ってきた。

「吸上げが悪い。危い、何とかしてくれ。時間がないから急いでたのむ」

彼は座席にもぐり込んで、あれこれ苦心している、どうも芳しくない様子。時間は刻々と経過する。

ジリジリしてきた。

特攻機の方はそろそろ準備完了して、私の方を向いて合図を待っている。

沖縄突入時刻は正確に十九時三十分たるべしと定められてあつ

た。

この時刻は、攻撃の成否に関係が深かった。

夕闇正に迫らんとする薄暮、突入する空からは艦船が見えて、敵からはこちらが見えないという理由からであった。

米軍のレーダーがどんな精巧なものかは、終戦後判ったことだが。

離陸が遅れるならば、日が暮れて目標が見えなくなってしまふ。

この重大時期に、出発からつまづきとは何としたことか。興奮と焦りが交錯して来たが、逆に意を決して日頃の愛機を見捨てることにした。

「予備機をまわせ」私の声は上ずってしまった。機付長ら整備員はこまねずみの如く動き出した。

テイク・オフ

おんぼろ予備機が掩体より引き出され、燃料補給、無線機の積み直し、すべての系統の急速点検である。

最早一刻の猶予も許さぬ。

少々の不備は目をつぶって飛んでゆこう。

こうなれば帰還はいよいよ望むべくもない。

しびれを切らした特攻機は、車輪止めを外して動きかかっている。

まだ座席にも上っていない私は、手を振って各機出発点へ行って待機しよう命じた。

爆弾をぶら下げて、如何にも重々しい四機は、ゴツゴツした感じ地上滑走を始めて、滑走路の北端へと向かって動いていった。

いよいよがまんできなくなった私は、機付長をせき立てて操縦席

に飛び乗った。

全力試運転もそこを片付けた。

指揮官機がおくれて出発点に向う恥かしさはどうしようもなかった。車輪止めの外せの合図をするや否や、私は急速度で飛行場を走り、四機の待ち受けている出発線へ飛びこんで、グイとブレーキを踏んで指揮位置についた。十分遅れた。

どうして取り戻すか、飛行中に対策を考えることにした。

出発早々から黒星、私の心は重かった。

然しこのどたんばであわてては、失敗の上塗をやる惧れがある。

二、三度大きく深呼吸をした。

徐ろに左右を見やれば、二機ずつが斜後方に整列してじっと見つめている。

もうお互に話すことが出来ない。

これからは顔を見ながら手で合図するだけである。

発着係の赤旗がサッと白旗にかわった。

「出発」

手を上げて左右を振りかえった。

彼等も直ちに手をあげて私に応答した。

フラップ半開、エンジン全速。

花蓮港飛行場の青草が矢のように彼方に流れ出して機体は真南の方にはばく進んだ。

容易に浮ばない。燃料が重いからだ。

いつもの倍近く滑走して漸く浮いた。

重い危険物をかかえた訓練不足の彼等が、無事離陸出来るかどうか、かなり困難である。

編隊離陸をやめて、空中集合に、時間はかかるが単機離陸にしたのも安全と考えてのことであった。

今迄に特攻機離陸時の事故を何回となく聞かされているからだ。無事浮いてくれ、心に念じながら上昇しつつ彼方を振りかえった。

二番機がすぐ後に続いている。三番機も浮いた。

海岸よりに旋回しながら集合しやすいように速度を落した。

最後の機が浮いて、一時に力の抜けるのを感じた。

編隊を組み終ってゆっくり旋回。

機首をめぐらせば一点の雲もなく、海はあくまで紺青である。汗が次第に引いていった。

今までの焦りと暑さがうそのように、次第に冷静になってきた。いつもの訓練のような錯覚に襲われた。

特攻機はびたりとついていて、いつもにない見事な編隊ぶり、見

下せば海岸にくっきりと四角な花蓮港飛行場。

われわれは高度五〇〇mで丁度その真上を南から北へ抜けながら

翼を振って地上の見送りに最後のあいさつを送った。

地上からは盛んに白い布が振られている。

立派な編隊が頼もしかった。

然しあまり長時間の編隊に精神を集中する余り、彼等が疲れて、

いざというとき頑張りがきかなくなることを惧れて、飛行場が見え

なくなっただけから、もう少し離れると合図してにっこり笑ってみせた。

今までの緊張がほぐれたらしい表情が彼等から見てとれた。

有無をいわせぬ

飛行帽の下のレシーバーからは、対空無線の雑音がジージーと間断なく流れてくる。

うるさくて仕方がない。

突入する以前に私からの発信は、特攻機の行動を米軍にさとられぬよう、如何なることがあっても禁ぜられていた。唯、地上からの連絡を聞くだけである。

私はレシーバーをもぎ取って、地上から何と言われようとも聞いてやらぬと決意した。

自らをわざとつんばにして全精力を、誘導と体当りに集中することにしたのだ。

左は岬々たる新高山系である。

沖合1km辺りを、海岸線に沿って一路北へ北へと高度をあげて進んだ。

沖繩は台湾のほぼ東に当るのに何故北へ向うのか。

ギリギリの燃料なのに何故回り道をするのか。

それには理由があった。

米軍の航空母艦群が、台湾東方海上に接近しているらしいとの情報を手していたからである。

沖繩へ直行する途中で、敵の哨戒機に引っかかれば一たまりもない。参謀からも、一旦台湾の北端へ出てそれから沖繩へ向うよう注意されていたのである。

私が参謀から受けた戦闘指揮要領は、他に幾つもあった。

その日の朝、突然、部隊は台北の師団司令部より、特攻四機の出撃命令を受けた。

間もなく、軍参謀が作戦指導のため台北から飛んで来た。

かねてより期する所はあったものの、まさかこの日に誘導の命令を受けようとは思っていなかった私は、途端に泡をくった。

特攻隊員は平素から身も心も準備が出来ている。

私だけがあわてて出動の準備をする始末であった。

ばたばた用意しながら、結婚したばかりの妻のおもかげがふっと頭をかすめて、靖国神社がいやでも浮んで来た。

参謀に私の気持など判らうはずはない。

操縦桿も握ったことのない、地上より転料して来た参謀が、どうして飛行機乗りの気持を理解してくれよう。

軍の参謀は到着するや否や、びしびしとそして事務的に、私の心の抵抗をおかまもなく指導していった。

○……沖繩の戦況は日に不利である。地上軍は次第に南方に追いつめられ、最早や全滅は時日の問題である。といって航空

軍としてもこのまま見捨てるわけにはゆかぬ。死闘の続く限り友軍の士気を鼓舞すること及び敵の戦力を少しでも消耗させなければならぬ。

○……米軍の台湾上陸の公算大なる昨今、それに備えて台湾所在の飛行機を温存したい。

さりとて沖繩攻撃を放棄しない以上、少数機による特別攻撃を敢行することになった。

○……本日の攻撃目標。慶良間列島の敵艦船。

攻撃時刻十九時三十分。

○……護衛戦闘機はつけない。敵戦闘機と遭遇した場合は空中衝突せよ。

○……突入前に無線の発信を封ずる。

○……石垣島の西方より高度ゼロ、即ち海上スレスレに接近せよ。

○……不時着飛行場は石垣島のみ。此所の地上部隊には本日の作戦は連絡済み。夜間不時着の場合は翼灯を点滅せよ。

○……誘導機自爆せんとするときは、連続長音を発信しつつ突入せよ。

○……本日の夜は月齢一。即ち真の闇夜である。帰還の場合は台湾の山にぶつけるつもりで帰ってこい。

ざっとこのような具合である。

航続距離の短い戦闘機では、昼間でさえ台湾、沖縄の片道飛行が、いいところである。

往路は海上ストレスで神経を消耗し、帰途は闇夜の盲飛行、連続六時間、自信も何もあつたものではなかった。

過去三ヶ年間で、第一戦で随分ひどい戦闘も経て来たが、こんな無茶な命令はなかった。

ショート・カット

高度計は一、五〇〇mを指した。

この辺が手頃だろう。

編隊は上昇をやめて機首を水平にした。あとは巡航速度で単調な然しながら緊迫した前進である。

私は宿題を解決しなければならぬ。出発の際に遅れた一〇分をどう切りつめるか。速度を増せば事は簡単だが燃料の消耗に無駄が生じて航続距離が問題となる。近道するより外はないのではないか。

地上からの無線は聞いていないし、飛び上がってしまえば参謀がどう命令しようとおこちのものだ。

指示されていた台湾北端からの変針を止めて、ずっと早目に宜蘭の沖合で方向転換をやる。機動部隊と遭遇したら、全員海中に突込むまでだ。

隊員一同、こんな私のたくらみを知るよしもない。

唯、私を信頼し切って飛び続けている。

われわれ特攻隊の轟々たるエンジンのひびきは、東台湾の海辺上

空に漲っていた。海上は気流が静かで殆んど揺れない。身体には絶えずリズムカルな震動が伝って心強い。私唯一人天地の間じつと浮んで静寂の真只中にある錯覚さえおぼえる。

今日の目的がこんなつらい任務でなければ、どんなにか快哉を叫びたくなるような空の旅であろう。

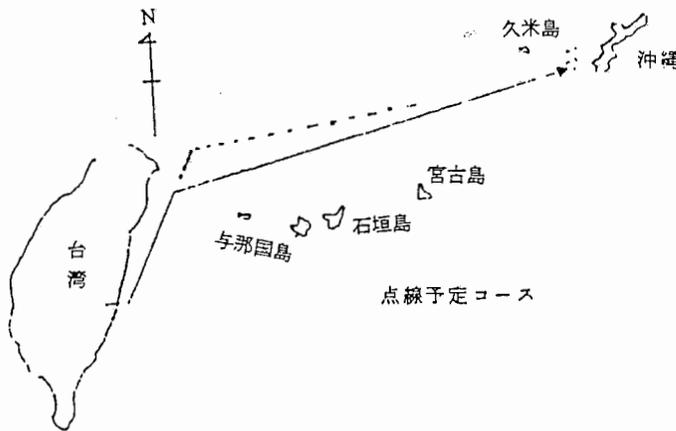
出発の興奮が醒めて、急に眠気を催した。

特攻機は、私を一心に凝視して編隊を崩すまいと努力しているのに、航路の近道を断固決意してから、私はもう何も考えなくなかった。

今からあれこれ取越苦勞しても仕方がないではないか。とにかく自分で決断した通りに飛んでゆこう。

今の私にとっては、取りあえず燃料節約の処置をとることであった。

徐々に高空レバーを開いて混合ガスを薄めはじめると、予期してたといえ、気筒温度計の指針は見る見る上昇してきたが、この際、エンジンの



過熱も止むを得ない。極度にまでガソリンの消費を節約することにした。

左に黒々とそびえる断崖は、われわれと併行して果しなく続いてゆく。

台湾の高嶺が東海岸までセリ出して来て、そのまま崖となって海に落ちこんでいるのだから、海辺に猫額の平地すらあり得ない。

南北を通ずる唯一本の交通路は、海上数百mの断崖の中腹を羊腸の如く見えかくれに這いまわっている。不便極まる東台湾が文化と隔絶していたのも、もっともなことである。

終戦後のことである。敗残のわれわれは基隆に集結するため一切の交通器材を中国軍にもぎとられて、一週間苦難に満ちた行軍をこの道路で強制されたのだ。

基隆へ基隆へと心にささやきながら、内地帰還の希望がなかったら、歩くことに不得手なわれわれ航空部隊は、ぶっ倒れていたかも知れない。

それでも飛行機では三十分たらずで、この奇観を飛びすぎてしまった。間もなく台湾北部の宜蘭平野が見えてくるまでは、特攻機は左のつばさを差しのべて、台湾の山々と最後の名残りを惜んでいるようであった。

見おさめ？ 風景

長い断崖が後に去って宜蘭の青々とした平野が眼下に展開し蘇澳の港には小さな機帆船が二・三隻浮んでいるのが望見された。

四番機が少し離れているのが気がついた。

調子が悪いのかな、今なら基地へ単機返すことも出来る。様子を訊ねてみよう。

速度を落して手を振ってたずねたが、大丈夫という合図をうけた。そして彼はしきりに宜蘭の街を感慨深げに見下ろしていた。

さあ、この辺から変針するのだ………いいよ台湾に背を向けねばならぬ。私は旋回する前になって初めて彼等に予定を変更して、ここから方向を変える旨を伝えた。

彼等は私の一〇分間切りつめの意図が判らなかつたかもしれない。だが、この地点より東へ向うことだけは了解してくれた。

特攻機よ、今のうちだ。沙婆の景色をよく眺めておいてくれ……。

静かに、後ろに、編隊は旋回を開始した。

私の羅針盤はゆっくり回転して、沖繩の方を示すとピタリと止まった。

前方は唯、渺々たる海と空の連がりである。

これから沖繩まで二時間半、何の目印とてなく、コンパスを唯一の頼りとしてゆくのだ。

機首を東に向けてからは、前途に横たわる幾つかの大きな不安が次第に鉛のように私に押しかぶさって来た。まず、敵の機動部隊に捕捉されれば、天運と思つてあきらめるより外はない。

それはさることながら、気懸りなのは全機がこのまま好調で飛び続けてくれるかどうかであった。

一旦飛び上ってしまえば、特攻機の調子がどうであろうと、私にはどうにも出来ないことだった。

一機でも不調になればどうするか。

特攻機の引返し可能距離であれば、単機帰還を命ずることも出来るし、あるいは再挙を期して全機引返すことも出来る。

だが、航程も半分以上過ぎた場合は、事故機は目をつぶって見捨てる他はなかつた。

戦争も末期頃の飛行機は、その粗悪ぶりがたるとや生命を託して死闘するにはあまりにも程遠いしろものが多かった。過去数年の激戦に耐えぬいて来た私にもこのころの飛行機には、内心ビクビクしながら乗っていたものだ。

まして重装備の爆弾搭載にふらふらしながら飛んでいるこの若鷲達の飛行機は、すぐ近くにありながら、向うを眺めるだけで、直接手の届きようがないだけに不安やるかたないものがあつた。

それよりもっと大きな心配があつた。これこそは私の全責任であるが、未だかつて経験したことのない飛行方法で目的地へ進攻することであつた。

それは、米軍の電波探知機に捕えられないために、海上二時間近く超低空飛行で行けという命令である。このような飛行は常識では到低考えられない冒険であつた。完全軍装で一里の道程を匍匐前進しろというようなものであつた。

戦闘機には自動操縦装置などというぜいたくなものはない。瞬時といえども手足を解放することの許されない原始的な操縦機構であつた。

また、超低空ともなれば、ぐっと視野が狭くなって恐らくは突入少し前に、沖繩の陸地が視野に入ってくる程度である。

わずかでも方向が狂えば沖繩からはづれたまま飛びすぎてしまつて、特攻機を犬死させねばならない。

島影一つない海上を、コンパスの目盛をずらすずに飛ぶ極度の注意集中力が要求される。

全く緊張そのものの二時間でなければならぬ。

それを敢えて遂行しうる体力、気力が我にあるか。これらの不安が重り合つて、私の気持は次第に重苦しくなつて来た。

九死に一生

台湾に背を向けた時から、私は直ちに風向風速を観測して、針路修正角度を決定する作業に専念した。飛行機は風の全量流されるという大原則がある。

二時間以上も横風を受ければ、目的地とはずいぶん離れた方向へいつてしまふ。そのために風向風速を測定して針路を修正して飛ばねばならぬ。

高度を高く飛行している今のうちに観測しておかなければ、超低空になつてからは測量不能である。

何でもない海上のこととて、私は海面の白い波頭を凝視しつつ、慎重に幾度も納得のゆくまで、くり返し測定した。

沖繩までこの方位を維持していかなばならぬ大事な根元である。特攻機は正しく編隊を組んで、調子は悪くなさそうである。あと二時間と少々四つの生命が、私を取り巻いているのだ。つい先

程、四番機が宣蘭の街を見つめていた姿を憶い出した。

宣蘭は私にとって命拾ひした体験があつた。

三週間前のことである。台北で修理完了した単を花蓮港に空輸すべしとの命令で、台北に赴いた私は機体を受けとるなりすぐ離陸して、飛行場上空で、三十分の試験飛行を行った。

異常なしと判断して、台湾山脈を越えるため機首を真東の宣蘭に向けて高度を上げたが、山は一面の雲におおわれ、雲上飛行の外はなかつた。

高度二千mで雲海の上を飛翔しているうちに突如異変を感じた。座席の中が黒ずんで来たのである。

オヤツと思つて注意すれば、顔も飛行服もうす黒くなつてアッ、油だ。

真黒な潤滑油が霧となって座席の中にしのびこんでいるではないか。

またたく間に風防ガラスが曇ってきた。

油圧計を見れば、針はゼロに近い。

しまった、潤滑油の漏洩だ。

やがてエンジンは焼付いてしまう。一体どこから洩れているのか、皆目見当がつかない。

見る見るうちに身体も座席もベトベトになって来た。いよいよ不時着だ。

だが雲の下はまだ峻嶒な台湾の山脈の筈。

このまま雲に突込めば、雲の中にかくれている山に激突は必至である。エンジンがストップするまで、雲の上をゆこう。それから雲に突入して一か八かの勝負を考えた。あと五分もすれば、山脈を横断できる計算であるから、何とかしてそれまでエンジンが回ればよい。

油圧計はとうとうゼロを指して、爆音がそろそろおかしくなってきたが、プロペラはまだ回転している。

一秒また一秒、生命の縮む思いに悩まされた。

風防ガラスも真黒になって、外が見えなくなったので、ガラスをあけて座席から顔を出し、雲の切れ目を血眼になって探しはじめた。

プロペラの回転が落ちて来た。仕方なく、機首を下げて降下の姿勢に入った。

あった、あった。たった一つの小さな雲の穴が近づいてくる。もうこれに飛び込む外はない。

下は山か平野か、生か死か当って砕ける。連続急旋回で厚い雲の層の中に舞い降りた。

どれ程降下しただろう。ひょいと、周囲が明るくなって雲下に突きぬけた。

やれうれしや、宣蘭平野が見え、海岸が望見された。

だが山もすぐそばに屹立していた。

丁度山脈を横断したすれすれのところで、幸運にも降下したわけ、全くヒヤリとした。

エンジンは完全に止ってしまったが、まだ高度は千mあった。しかし宣蘭の陸軍飛行場まで滑空でときそうにもない。

海岸にでも胴体着陸しようと考えているとき、ふと近くに見なれぬ飛行場を発見した。

風上から曲芸のような着陸をやったのけて、どうやら人も機体も無事ですんだが、海軍の司令がお化けようになった私の姿を見て腹をかかえて笑っていた。

海軍さんに手伝わってもらって機体を点検してみたら何のことはない、油タンクの蓋がはずれていた。

私が着陸してから一時間後、この海軍飛行場から、特攻機九機が沖繩沖空母攻撃のために離陸していったものの、二十分も経たぬ頃から、爆音不調の機体が相次いで五機も帰ってくる始末。

海軍さんの飛行機も悪くなったもんだ。心細い戦力になってきたと思いつつ、命拾いした私は近くの陸軍飛行場に移って機体を整備することにした。

歌声 悲し

それから二週間後、私達の部隊は、やはり機動部隊攻撃のため、特攻の待機命令を受けて、この宣蘭に前進して来た。この時出撃を予定されていた特攻隊員に今、四番を飛んでいるKがいた。

彼が宣蘭に感慨深げに見下していたのには、この町にそれだけの理由があったのだ。

いよいよ宣蘭から明日出撃という前夜のことである。

われわれ飛行隊一同は、町の料亭で盛大な別離の宴を張った。

例の如く、特攻隊を中心に活気溢れる騒ぎとなった。一人一人の心はやはり割り切れぬものがあつたはずだが、うわべはあくまで賑やかな酒宴となつていった。

泣き言二つこぼさぬ特攻隊員の胸中は、きつとかきむしられていてもと思ふ。

彼等独特の賛歌「特攻隊の唄」がくり返し合唱された。

「母の写真にひざまづき

お先にあちらへまいります

君のおんため、お母さん

よくぞやったと、ああ、ばんざいを」

すつくと立上つて胸をそらし、天の一角を仰いで歌う彼等の姿。

「男なら、男なら

未練残すな、浮世のことに

花は散りぎわ、男は度胸

運と天は風まかせ、男なら、やってみな」

聞く者の心にひしひしと訴える悲壮な声だった。

こんな好漢を明日にも散らすのかと、われわれは心の中で泣いた。

酔がまわるにつれてそろそろ座が乱れて来た頃である。いつのまにか話題は重貞論に及んでいたようである。女を知らずに死ぬのも亦よきかな……。いや、そんなもんじゃない……。などと一同真面目な顔付をして大声でわめいている。

果ては、Kが重貞である。このまま死なせてなるものかどうか、

Kが賛否両論の肴にされなかった。

「おい、そう云うけどな、これは実話だから真面目に聞けよ。特攻で死んだ或若桜のおふくろが、彼の美事な突入ぶりを伝えに来てくれた戦友に尋ねたそうだよ。倅は女を知らずにいましたが、そのまま死んだのでしょうか、とな。そしたらその戦友がだ、御子息は清い体で突入されましたと答えたら、おふくろは何と申したと思ふ？」

「満足に存じますと……」

「馬鹿野郎。だから貴様は世の中のことが判らねえと、再々云つとるんだ。」

「何だ、ちがつてたのか」

「あたりめえよ。その母なる人はだな、おお倅、かわいそうに……」

……とハラハラと落涙して悲嘆にくれたそうだ。」

一同の視線がKに向けられ、同僚のSがただではおかぬ表情をして詰めよつた。

Kの神経質の瞳は、きつとSをみつめた。

「貴様、本当のことを言え。まだか」

「うん」

「なあ、おい、明日は死ぬんだぞ、心残りはないのか」

「運命だ……」

「あきらめたのか」 「……………」

「意気地なしめ」 「……………」

「よし、俺にまかせろ」

Sは何を思ったのか、つと立上つて裏口へ消えていった。

「なんだ、なんだ」 「どうしたってんだ」

彼の見暮に驚いた三・四人がどやどやとあとにつづいて出ていった。

折角の座が、こんなことから少々白けかかって来た。ややあって、そのうちの一人があたふたと戻って来た。

「Sの野郎、裏の離れ屋へ行って、この家の一人娘に直接談判してる。仲々うんと言ひよらん、考えてみりゃ、あんまり突然だから無理もねえな」

「いいんだ……俺はいいんだ」

Kはぼつたりつぶやいた。

「何を言うのか。戦友の志だ、有難く受けなよ」

「俺は……これだけの人生で満足している。おせっかいはよしとくれ……俺には俺だけの誇りがある」

Kのまわりの連中は、折角の酔も醒めて、しゅんとしている。

そこへ興奮したSが、いきなり飛び込んで来て大声で叫んだ。

「殺してやる。叩き切つてやる。おい、軍刀をよこせ。畜生……」

…非国民！

交渉不成立に酔いも手伝い彼は激怒しているらしい。それこそ、おっとり刀で再び裏へ引返そうとして、危く一同に取り押えられた。

女にあしらわれたと思ひ込んで余程くやしかったらしい。涙をぼろぼろこぼし乍ら、わめき立てていた。

Kは座ったままうつむいていた。

翌日、Kは出勤したが、機動部隊を発見出来ず引返し、今日私と共にそのままの体で飛んでいるのだ。

最後のちやめっ気

ふと我に返つて四番機をのぞいた。

ああ、今日彼は神になる。彼は満足しているのかもしれない。そ

れでいいのか、いや誤りであろうか、私には到底解けぬ人生観である。

さあれ、ふるさとに、我子の無事を祈る母なる人に思いを駆せて、胸がしめつけられて来た。

彼の視線がピタリと合うと、こっくりうなづいた。

私も激励をこめて、二・三度強く頭をふつてやった。

何を考えているのだろう。もの言えぬ悲しさ、お互の意志は僅か十数mの空間をスレ違っているのだ。

南方はるか水平線近くに灰色にかすんで見えるのは与那国島である。

台湾をふり返ればまだ山のいただきが連つて水平線上に長々とかんでいた。

あと二十分もすればいよいよ超低空にうつるのだ。

二番機のTが何か座席でござござやっている。

何か異常があるのかな。

いつもの理知的な青白い表情がそれ程変つていないようだから、別に気になる程のこともあるまいが、不断からともすれば思いつめているような気配の感じられた彼のことだ。安心はならない。

座席のポケットに手を入れているようだ。

何かとりだして、もそもそやりはじめた。

少々気懸りになり出したが突然その正体が分つた。大きなバナナをむいていたのだ。

私の方へ二・三度見せびらかすと、さも美味そうにもぐもぐやり出した。

食料の積込みとは恐れ入ったが、きつと戦友の餞けであろう。

「おい一本よこせ」と手を出してふざけた私に、白い歯を見せ

「ここまでおいで」をやって見せた。それにしても何と心にくい振舞だろう。

おや、全機が次々にやり出した。

彼等はきつと申し合せていたにちがいない。

編隊長の私だけが指をくわえているでわなにか。

うっとうしかった私の心が、この小さな事件のおかげで余程明るくなった。

彼等の片手がお留守になっている間は、編隊の隊形も間のびがしたり、いびつになったりしていたが、やがて満足したらしく、再びもとの態勢にもどった。

せんりつ(巨岩)

さあ高度を下げる時刻がやって来た。

エンジンを絞らずに機首を下げ、徐々に降下することにした。高度計の針はゆっくり回転をはじめ、速度はぐんぐん増加して機体が少しずつ震動しだした。

海面に白い波が見えるのはかなり荒れている証拠である。一、〇

〇〇m、八〇〇m、五〇〇m、

連続して編隊降下がつづいて、大きな波のうねりが次第にクロウズ・アップしてくる。

気流も悪くなって時折機体が大きくガクンと震動するようになった。

高度二〇〇mを切る頃、突如異様な形相をした大きな岩が左前方より接近してきた。

もう陸地は、沖繩まで絶対に見えないと観念していただけに、無用とばかりしまっていた航空地図をあわてて取出してよく見れば、

なるほど小さな点が印刷してある。直径一〇〇m、高さ五〇mもあるうかピラミットの如く海面にそそり立って、鋭くとがった幾つかのピークが奇怪な趣を呈している。

平地はおろか、草一本もないが、汀には飛行機の破片が至る所に散乱している。

ああ、これが噂に聞いていたラレイ岩か。

攻撃の帰途、傷ついた友軍機が藁をつかむ気持で時折ここに不時着し、誰も知られぬまま何人ともなく餓死したらしい。

鬼気迫るこの岩も瞬く間に後方に飛び去った。

もう石垣島も遙か南方に過ぎた筈だ。

編隊はいよいよ海面ストレスまで降下してしまった。

To be or Not to be

今日出発前、私が彼等と作戦を打ち合せた際に、特に超低空飛行時の指示を厳守するようくれぐれも要求していた。それは、「海面超低空は高度感に錯覚を起こし易く、機体を海面にぶっつける危険が甚だ多い。」

誘導機である俺は、高度五mを基準として飛行する。各機は絶対に誘導機より下ってはいけない。

「もし俺より低く飛んだ瞬間、おだぶつになるぞ。」これだけは彼等に守ってもらいたかったのである。

私の機体は波頭をかすめて飛んでいる。

スピード感が強烈で目がくらみそうだ。

僅かでも気分のゆるみが出れば万事終りである。

高度と方向の維持に全神経を緊張させていくうちにそろそろ敵哨戒機の警戒空域に進入してきて、上空索敵までやらねばならぬ破目

になった。

顔を動かして索敵などやっていたはとも超低空は維持できない。

また、こんな低い位置で敵と遭遇しても、戦闘どころかそれ迄だ。

無謀かもしれないが、私は思い切って索敵はやめることにした。

アメリカのレーダーが、果して参謀の注文通り超低空をキャッチ出来ないのだろうか、然し案外そうかもしれない。

敵機に捕捉されても逃かくれる雲一つない快晴であるからには、せめてレーダーから逃げるために命ぜられた通り超低空に全精力を集中した方がまだましかもしれないのだ。

機体は気流にあをられて大きくゆれている、ヒヤリとして機首を立て直す。

波しぶきが何回となく風防ガラスに飛散してくる。

特攻機は私の注文通り稍高目に飛んでいるから先ず心配はあるまい。

特攻機の航続距離から考えて、台湾引返し可能ギリギリの時刻が迫って来た。私がこのまま回れ右をすれば、彼等は生きて還れるのだ。

エンジン不調などと事故理由はつけようと思えば何とでもつけられる。

私一人が責任を負えばいい。

いっそうのこと、ここから還ろうか、この若い生命は救われる。そして私迄も…………。

彼等は特攻要員の命令を受けて以来、連日内心の苦闘を経て来て一日一日が死より苦しい試練であった筈だ。今引返せばまた苦悩をつづけさせることになる。このまま死なせた方が生への悩みを少な

くしてやる思いやりというものではなからうか、いや生命は尊い。

如何なることがあっても生命はかりそめにも奪うべきものではない。

返るが是か、進むが是か。私の心は錯乱した。

あれこれ思索しているうちに、とうとう運命の時刻が去ってしまった。

いや、まだ近くの石垣島不時着場へは引返せる。

彼等には着陸困難な飛行場であっても胴体着陸を命ずればよい。安全装置さえはずれなければ爆弾は炸裂しない筈だ。命令に背いて

彼等の生命を救うかどうかの決心を行う時間はまだ残っている。緊張また緊張の連続、私の体力も気力も可成り消耗して来たことに気付いた。

まだ二時間しか飛んでいないのに、腰の筋肉がおかしくなってきた。

身動きの出来ないきゅうくつな座席では、背伸び一つ出来ない。頭迄が少しかすんで来たようだ。

あと一時間航程の自信がぐらつき出して、目標を目前にして参ってしまう予感に襲われた。

石垣島へ引返したい誘惑が頭を拾げて来る毎に、これを打ち消し乍ら、心はふらふらになって飛び続けてゆくのであった。

私の心の闘いは、彼等には勿論判らう筈はなかった。愈々迫ってくる突入にのみ専念しているのであろう。時間は刻一刻と過ぎ去っていく。

ホソを固めて

遂に最後の生還可能の限界時刻に達したが、まだ私の心は狂っていた。

思い切って彼等の一人一人の顔から何かを読みとるつもりで、風防ガラスをあけてふり返った。

そこに眺められた光景は、私の苦悩を一度に吹き飛ばした。

彼等は申し合せたように、一斉に風防ガラスをあけっぱなしにして、飛行帽をぬいでいるではないか。

額にキリッとした日の丸の鉢巻姿である……真剣勝負の構えである。

三番機のMは二十になっただろうか。赤いほったをして愛くるしい、桃太郎そっくり。

一同決意が漲っている。

判ったよ。君達やってくれるのか。

そうか、私だけがびくびくしていたのだ。

背中をドンと叩かれたようなショックを受けた。私自身が助かりたいばかりに迷っていたのだ。

よろしい。私も決心がついた。

行こう。いや、引っぱっていくよ。

出発前の宿舎で最後の食事を一緒にしたことが思い出された。

料理番が精魂こめてこしらえてくれた御馳走は、長いこと口にしたことのない握り寿司であった。

食事をしながら私の心を看破したらしく、彼等は言ってくれた。

「僕等は突込むだけです、貴方は大変ですね。生きて長い道中を還らねばならんですから、お察しします。くれぐれも自重して下さい。」

死にゆく人から逆に慰められた私は、返す言葉が知らなかった。

太陽は西に傾いて、快晴の空も漸く一面の夕焼けに照り映えた。

とうとうここ迄哨戒機に喰いつかれなかったのは、何と僥倖だったことか。

大体この辺で今迄の特攻機の大半はやられてしまっているが、上方の空を見渡した所、全然哨戒している気配がない。

或いはこのまま発見されずにゆけるのではあるまいか。まだレーダーにも捕捉されていないらしい。

超低空一時間半、もう体はくたくたになってしまつて、ただ手足だけが機械的に操縦している。

陽は水平線に没し、空はまだ明るさを残しているが海は次第に紺青の濃度を増して来た。

海面よりの高さの判定が次第に困難になりつつある。羅針盤だけでも二時間も飛んだ。

あと三十分で沖繩の筈だが、水平線上まだ何も見えない。果して針路は誤っていなかったろうか。

僅かに方向のズレがあつても、カラカラになりかけている特攻機の燃料では、目標迄導くことが出来なくなる。まだか。まだ見えぬか。

焦慮と不安。自分の針路に対して自信を失いかけたが、今から方向を変えてもはじまらない。

次第に暮れゆく空に追っかけられながら、目を皿のようにして前方を凝視した。

体力も気力も限度に来てしまった。

Good bye!

どれだけ時間が経つたろうか。

疲れきった眼にぼんやりと、暮れゆく大海原のはるか彼方に、ど

うやら島影らしきものを認めた。

もうこの時の私の意識は錯乱の一步手前であった。

私の航法は誤っていなかったのだ！

ぐんぐん近づくと島は次第に左前方に大きく浮び上ってくる。これぞ久米島だ。

四国の屋島台地とそっくりの形をしている。

特攻隊員の表情が引き締ってきた。

久米島の稍右手に慶良間列島が散見される筈だが、夕暮のため視界が狭少となつてはつきりしない。

上空に哨戒機なしと見た。

彼等もよくぞここ迄無事に来てくれた。

鉢巻きの日の丸が鮮かに見え、襟に巻いた白いマフラーがはたとゆれている。

久米島を真下に見て、突入十五分前と判断した。

空の明るさは幸にも特攻にお逃え向きの薄暮となつて、彼等は今やおそしと私の攻撃命令を待ち受けている。

疲労困憊の極にあつた私の体はいつのまにか生れ変わったように緊張していた。

今や一刻の猶予も許されない。

愈々攻撃開始だ。

特攻隊員は連日練習して来た突入方法を実行するのみ。彼等はきつと立派な体当りを敢行してくれるにちがいない。

「安全装置をはずせ」

私の信号で全機一斉に座席の引金を引いた。

真鍮の破片がハラハラと落ちて黒い海面に消えた。

爆弾は今や起爆状態である。

「さようなら」「さようなら」

彼等の一人一人と手を振り合つて、最後の別れを惜んだ。

「攻撃！」

躊躇なく最後の命令を発して私は急激に機体を前後左右に振つた。

各機一斉に私から離脱した。

間隔五〇〇m、一列横体に展開して、彼等はエンジン全力回転をあげながら、ぐんぐん沖繩目指して高度を上げて突進した。

慶良間列島は夕闇に浮んで、その背後に地上軍死闘の地、沖繩本島が横たわつて視界に入つて来た。

遂に目的地到着！ 目指す敵艦船や如何にと目をこらす。

いるわ、いるわ。幾百隻とも知れない艦隊船団が、黒いゴマを撒いたように浮んでいた。

ぐつと体が引き締つて二・三度身震いした。

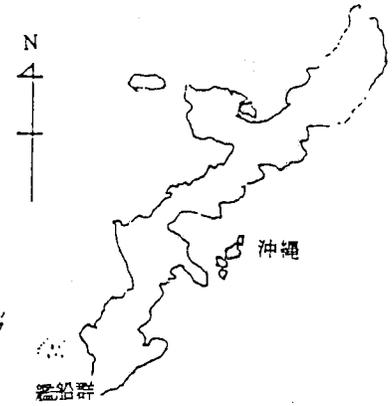
すさまじい砲火

時、正に十九時三十分。既にして予定した突入時刻となつた。

沖繩上空は次第に暗さを増して、戦果確認のためには一分一秒を争う時間である。今や予定に遅れること数分にして、激しい攻防戦が展開されんとしているのだ。

私から離脱した特攻機四機は、五〇〇mの間隔に開いて、真一文字の横隊で全力上昇してゆく。少なくとも一、〇〇〇mの高度から急降下しなければ、所望の突入スピードが得られないからだ。彼等は今やガソリンの最後の一滴まで使い果しているにちがいない。

私は特攻機のほぼ中央一、〇〇〇m後方から追隨していった。次第に高度を上げる。黒ゴマの如く眺められたアメリカ艦船群は、漸次拡大し、豆粒程になつてその全貌を露呈してきた。戦場上空は敵



機の前の一瞬である。

あと三km。

ああ 無情

目前の四機は高度をとり終って水平飛行に移った。暮れゆく海面に、灰色をして浮ぶ艦船の数々、よくもこれだけの物量があったものだ。空母は見あたらぬが戦艦や巡洋艦をはじめ大小無数の艦船が慶良間列島と沖縄の間の海上にひしめき合っている様は誠に壮観。これを攻撃するのは、僅か四機、悲壮という外はない。

ここまで無疵でここまで進攻出来たことは大成功だった。

私も戦闘準備だ。真

下に吊り下げである落下タンクが空になった。燃料コックを翼内タンクに切替え、落下タンクを捨てるため落下スイッチを押す。しまった。落ちない。翼の下は目視出来ないが、座席のランプが青にならん以上は、くっついてはいるはずだった。こんな図体の大きいものをぶら下げて、とても身軽な空中戦は出来ぬではないか。この期に及んでこんな不手際をひき起すとは！ おんぼろ予備機に乗ってきたあたりだ。

次は機関砲の試射をやる。ド……連続十数発威勢よく空中にぶっ放す。曳光弾がきれいな尾をひいて消えていった。刻一刻。急速に目標は接近して来る。あと四km。まだ敵の照空灯が斉射しない。アメリカ軍の対空放火の凄まじさは、すでにニューギニア、フィリッピンの戦闘で経験済みである。身の毛もよだつような、物すごい弾幕を覚悟せねばならんのだ。

突如、戦闘の火ぶたは切って落された。前方四機の周囲は猛烈なる対空砲火の弾幕に包まれてしまった。赤、青、紫色あらゆる色の炸裂が、小さな機体をたちまちにして取巻く。数百の船舶の何千という火砲からたった四機に対して、必死に打ち上げる防衛砲火である。瞬間見とれてしまった。とにかく物凄いの……一語に尽きる。

今までの戦場ではとてもこんなひどい砲火には、お目にかからなかった。私の体験では、照空灯の光芒の中でドカドカ射たれたものだが、ここでは照空灯無しで、射ちまくってくる。それにしても一ヶ所に集中する御手並は、実に見事である。

あまりの華麗さに目がくらんで、小さな特攻機の機体は見えなくなった。薄暗い大空の四ヶ所に、大きな火花の集団が浮んでいるようであった。

早く突入せねば、このまま撃墜されてしまうぞ、やきもきする。こちらの気持も無頓着の如く彼等は所望の距離まで接近しようとしてか、悠々直進しているらしい。それは、対空砲火の火花集団が同じ

高きで移動していくので、それと知れた。

早く早く、心で勵ましている途端、ドカドカドカーン、私の機体は大揺れに震動して、あたり一面は大きな炸裂につつまれてしまった。目もあけられぬまぶしさである。パンパンと音を立てて被弾の破片が、機体にはね返ってゆく。一瞬私は急降下と急反転をつづきさまにうって弾幕離脱を試みていた。それ以上接近しては、すぐ叩き落されそうな予感がした。数秒の後機体の周囲はもとの暗さにもどって、離脱は成功していた。折角の高度が落ちてしまった。

急旋回して再び沖繩上空を眺めると——しまった。火花のかたまりが、三つしかない！ 右から二番目が欠けている。申し訳けないことをした。

この一機の最後を確認せず、無駄死させた。

取返しのかめ悔恨の念にしみつけられた。チラッと時計を見た。十九時三十五分。

残りの三機はまだ水平飛行の模様。目をあさむく火花が空中の三ヶ所に集中している。

ここまで健在であるのは、よくよくの奇蹟という外ない。

私は、敵の射程ストレスを飛びながら、ハラハラして見守るのみ。

もう突入せねば、全部やられると思った瞬間——一機が火だるまになった。左から二番目である。

大きな火焰が落ちてゆく。

間もなく空中分解して黒い海面に吸い込まれるように消えていった。残るは二機のみ。

二つの対空砲火は、依然として一、〇〇〇m上空で炸裂をつづけていたが、やがて下方に移動を始めたと思うと、次第に速度を増して、海面に近づいてゆく。

あッ。二機とも突入だ！

暗くなって機体は見えないが、必死に射ち上る砲火が、その所在を示してくれた。

息を殺して海面を注視、もう戦艦か、巡洋艦かの判別も困難となった。

一秒。一秒。いよいよ海面。

如何。一艦の舵側到大爆発！

相次いで他の一艦に！ やった、やった。見事にやっつてのけた。

その閃光は紫がかったが、この大きな炸裂も瞬間に消えた。

期待していた火炎は起きなかったが、相当の被害であることは間違いない。

孤独の帰還

立派な突入ぶりである。

沖繩上空からあらゆる光が消えて、もとの静寂にもどった。戦艦か巡洋艦か轟沈か大破か。

この距離ではとても判らない。確認するため思い切って接近することにした。

二隻ともかなり大きな艦種であることは、漸く識別されたが、敵に与えた損害の程度が判らない。

艦側に命中しているならばもう沈みかけているはずだ。もう一押の進入だ。

とたんにグワーンと一斉射撃につつまれ、爆風で機体は木の葉のように揺れ、ミシミシと翼がきしむ。

急速反転して漸く弾幕から離脱、やれやれと機体を眺め回したが、幸にもまた被害はなく、エンジンも回転している。

いよいよ真暗で判然としないが、このまま帰っては英霊に相済まぬ。

帰還のガソリンが心細くなったが、もう一度高度を上げて突入しよう。これが最後の突入と決めた。

こんどは異なった方向から高速度で接近していったがすかさず目もくらむ閃光につつまれてしまった。

もう少しの辛抱だ、頑張ってみたがやはりいけない。退き時だと直感して涙を呑んで離脱した。

とにかくこの物量には完全にカブトをぬぐほかにはなかった。突撃すること三度。命中には奇蹟であっただろう。

とつぶり暮れた沖繩上空に、私はただ一人取残された。完全に戦果を確認し得なかったことを英霊に詫び、そのめい福を祈りながら、割りきれぬ気持で徐ろに機首を西に向けた。

言いしれぬ孤独感がひしひしと迫ってきた。

たたかいは終わった。だが私は帰還せねばならぬ。これからまた三時間の暗夜航路は考えただけでもいい気持ではない。

さて無線封鎖も解除された。戦果報告をやる。花蓮港基地での対空無線班は、全身これを耳にして、私からの発信するピッピを待っているにちがいない。どうせこんな無線機では届かぬとは思いますが手持無沙汰な手を動かして操縦桿についているボタンを押してみることにした。レシーバーを耳にはめてみたが、雑音ばかりで頭が痛くなる。すぐ取りはずした。発信だけにしよう。

まず自身の略号「ち・く・ご」をくり返し打って誘導機が存在を知らせた。次に戦果はどう報告するか。艦種、隻数、損害を要求されていたが、残念ながら私は艦種も損害も確認していない。仕方がない、とにかく「中型艦二隻」と発信してお茶をにごすことにし

た。

先方が聞いているかどうか、さっぱり頼りない。数回反復しているうちに馬鹿らしくなって止めてしまった。(基地ではこの無線をキャッチして大喜びであったそうである)

スワ敵機？

沖繩を背にして五分もするともう鳥かげは視界から消えて、あたりは一面の闇が忍びよってきた。落下タンクの落ちない事故がうかび心をゆすった。スピードの邪魔だ。帰還のガソリンが余分に要る。思い出してスイッチを押すが、どうしても落ちない。とうとうあきらめた。

座席に灯を入れる。計器盤がきれいに照明されて幾分落ち着きを与えてくれた。

まだ敵機の哨戒圏内だから油断はできぬ。電探射撃をする米機と暗夜の空中戦など御免蒙りたい。とにかく一刻も早く戦場から遠ざかることだ。

ピュツ、ピュツと火箭が機体をかすめた。来たな、やっぱり敵機に攻撃をかけられた。ぐいっと操縦桿を引いて急旋回、ふり向いても暗くて敵機がみえぬ。またまた曳光が飛んできた一体敵は何機だろう。なんとかしてこの射弾から離脱せねばやられる。失速しそうな急旋回を連続して離脱を試みる。それでも身近く光が流れる。今度は力一杯方航舵をふんで、サイドスリップで射弾をそらす。相手が見えないので射つに射たれない。知っているだけの秘術をつくしてぐるぐる舞い狂う。いよいよこれでおしまいだ。それにしても機体にはカチンとも命中しない。少々おかしいと気づくと火は前方より飛んでくる。ハテナ。機関銃の曳光らしくいな。(落ちつけ)機

首をたてなおしてよく観察することにした。判った。何のことはない。自分のエンジンの排気管から、火の粉が飛び出しているではないか。明るい間は気がつかなかったが、暗くなつてから目に映じたものだ。平常は使用せぬ予備機の排気管についたカーボンが、灼熱されて飛び出ているのだ。とたんに吹き出した。沖繩上空で相手なしに、りきみかえつてぐるぐるの回りに戦闘していたわけだ。安心するより馬鹿らしさに腹が立った。使ったガソリンが惜しい。

月齢一、闇夜である。戦闘機の長距離海上航法にとっては何も見えない最も苦手な夜である。然し私には運がついていた。

快晴である。星夜は真の闇とはならず、幾分でも視界がきくのだ。目が慣れるにしたがつて、一〇kmほど先の島影位は、判定できそうだった。エンジンはまだ好調である。高度を二、五〇〇mにあげた。戦場を離れて三十分。もう敵機も追いかけてこないだろう。興奮していた心も漸く平静にもどった。

帰還もコンパスが頼りだが、第一の目標宮古島さえつかめばあとは西へ西へと石垣島、与那国島と飛石伝いに飛べる。そうすればいやでも大きな台湾にぶつかるだろう。大胆に飛ぶ外はないのだ。異様な光の存在が気になり出した。翼燈そっくりである。鋭くとぎすまされた戦場の神経は、往々にしても星の光を敵機と錯覚した例が少くない。私もニューギニアで幾度かこれに悩まされた。先ほど、てんでこ舞いの一人相撲を演じたことと思ひあわせて今度はあわてないことにした。でも見れば見るほど翼燈そっくりである。エエイ星にしてしまえ。私は上空を見ないことにした。思ひ出したように頼りない無線を発信して気をまぎらわした。次第にねむくなつてくる。

あれから一時間を経過した下は黒々とした海また海である。気流はよくてビクとも動揺しない。一度にどつと疲れが出た。体の筋肉

も関節も痛みだしてじっとしてられない。それより一番恐ろしい睡眠に襲われはじめた。いやでも眼が重くなつてくる。いつの間にかうつらうつらして、はっと気を取りなおす。機体は傾き、方向もでたらめになっている。頭をたたく、膝をつねる、この戦いの苦痛はまた格別だ。

頭の中が次第に濁ってきた。異様な音！そして震動！どこか遠くから呼びもどされたように、ふと我にかえた。何か異常発生！かすんだ眼でぼんやり計器盤を見ればどれもでたらめだ。次第に正気になって驚いた。飛行機は横倒しになって海面めがけて急降下している。高度はあと五〇〇m。危険速度を突破している。危い！思わず叫んだ、急速に操縦桿を引きあげれば機体はバラバラに分解する。三〇〇m、二〇〇m、高度は下る。海上一五〇mで危うく機首が直立った。あと数秒遅かったら……冷汗がスーッと脇の下を流れた。

何分間位ねむっていたものかもわからない。一度に睡気がフツ飛んだ。仕方ない。仕方ない。安全第一で行こう、高度五、〇〇〇mと決めた。ガソリンを節約しながらエンジンをだましすかして、いつもの倍位の時間をかけて、漸く上昇した。ねむ気はさめたが、今度は猛烈な寒さを感じ出した。南方とはいえ五、〇〇〇m上空は零度の寒さである。着ているものは熱帯用の飛行服とアンダーシャツ一枚をして救命胴衣をまとっているだけ、次第に体が冷えきってきた。一難去つてまた一難だが、眠るよりこの方がましだ。

もうそろそろ宮古島の時間だと思ふ。だが一向にそれらしいものが見えてこない。さきほどから一人相撲や自爆しかけたりで、相当道草をくっている。それにしてももう島が見える筈だ。宮古島ははずせば台湾をつかむのおおぼつかない。じりじりするうち、遙か南方海面に稍黒ずんだ海域が望見された。さては宮古島？でも随分

遠いようだし、まだ雲の影のようにも思える。思い切って変針して確認しようか、いや待て、もし島でなかったら、残り少ない燃料と頑張って心はいよいよ動揺するだろう。ともすればふらつきがちなのに強く断を下して、そのまま直進することにした。果して十分後に宮古島の上空に出て一とまず安堵した。島は灯火管制をして眠ったように静まりかえっている。私の爆音は米軍機の通過と思われているかもしれない。ここから針路を真西に向けた。やがて帰還行程も半ばに達する。生還の望みが少しは持てるようになった。先程からの寒さで身体がガタガタふるえ出してとまらなくなった。おまけに涙とはなみずがとめどなく流れ出して、始末におえぬ。

安全第一主義もとうとう我を折り一、〇〇〇mだけ値切ることにして、高度四、〇〇〇mで妥協したら少しは楽になった。いいかげんなものだ和我ながらおかしくなった。

第二目標は石垣島である。ここは飛行場もあるし、対空無線が待機している筈である。はじめてレシーバーと真剣に取り組んだ。呼出しをかけた。こごえた指先でダイヤルを回す。あれこれと操作するが、雑音ばかりで一向反応がない。これ以上の努力は、消耗した今の体力ではとても続かぬ。とも角対話を諦めた。

またうとうとやりはじめる。機体が首を振り出しては、はっとして立直すこと数度。寒さと睡眠の両方が心身をさいなむ。我慢ならぬ苦しさ。先刻別れたばかりの紅顔の隊員達がチラリと目に浮かんで消えた。何の刺激もおこらない。いよいよ私の意識も限界に近づいた。何かすることはないか。そうだ。夜食を積んでいることをすっかり忘れていた。少しも食欲はないが、私の腹は空になっているにちがいない。操縦桿を股にはさんで弁当を取りだした。のり巻がつままっている。開けただけでもういやになった。それでも無理に冷え切った一つをほうばって、お茶で漸く胃袋に流しこんだ。

残りをじっと見つめていたが急に癪にさわって機体外にほうりだしてしまった。

遙か前方に石垣島が見えた。これで帰還行程の半ばは過ぎたことになる。ほっとすると同時にこれから一時間半をどうして持ちこたえるか、急に自信を失いかけた。ここで着陸すれば残りの苦痛はなくなる。安易の誘惑が頭を拾げた。正確な判断力を半ば喪失しかけた現在、全然未知の飛行場にしかも暗夜着陸を強行することの如何に無謀な冒険であるかを、未だ私はわきまえていた。

されば胴体着陸。いや落下傘降下という手もある。だが今更機体を捨てるには忍びない。そんな勇氣も湧いてこなかった。

とに角上空から飛行場を詳細に観察しよう。そして自信があれば着陸敢行と決めた。いよいよ石垣島の灯が接近して来た。ぐっと高度を落して進入したが、暗夜のことである。島の状況がさっぱりつかめない。私は翼燈をつけ前照燈を照らして大きく機体を左右に振って友軍機たることの合図をしながら島の上空に達した。飛行場ではすぐにも限界燈や着陸燈を点じてくれるものと期待した。高度五〇〇mで島の上空を旋回し始めたが地上からは一向に反応を示さない。第一どこが飛行場かさっぱり判らぬ。二回、三回、と旋回を続けたが、島は眠ったように静かである。米軍機と勘違いしているのだろうか。盛んに前照燈を点滅してみせるがやはり駄目だ。今宵沖繩から帰還の友軍機がここを通過することを、島の連中は予め連絡を受けている筈なのに。だが、ここにいたってはいいたしかたない。時間にして十分近くを消費した。着陸断念。落胆したり憤慨したり何とも言えぬ気持でこの島を去ることにした私は、再び機首を西に高度を上げて飛びつづけなければならなかった。いつまでこの孤独は続くのか。もう高度三、〇〇〇m以上に上昇する気にはなれなかった。又々貴重な十分を失ってガソリンが惜まれてならぬ。そ

れでも計器の針はどうかやら花蓮港迄帰れそうな残量を示してくれていた。

何の予告もなく計器盤の照明燈がフツと消えた。いやな予感に襲われた。電気系統の断線である。エンジンは回転している所をみると座席関係の故障らしい移動懐中電燈をさぐり出して、スイッチを入れてみるが駄目だ。唯一の頼りになる計器が見えなくなるとは致命的だ。然し有難いことには計器の目盛には螢光塗料が塗ってあった。それにしても泣き面に蜂である。

やがて航空地図通り与那国島が見えたが、機はその北端の沖合をかすめて行く。大分南風が強くなって北方へ流されているらしい。針路を稍南に修正する。与那国はその小さな楕円形を海上にくっきりと現わしていた。昼間なら台湾の山なみが見え始めるのである。九分通り生還の見通しがついたと思つた。

時計を見ても暗くて時間が判らない。やがて夜も十時をまわる頃だろう。離陸以来六時間、この位の飛行は何ともなかつた筈の私も今日だけは徹底してこたえた。台湾が近づくにつれて天候悪化のきざしが見え始めた。今迄満天の星であつたのに前方が消えはじめ水平線が判らなくなり機体の姿勢維持が困難となつて来た。

開戦当初、加藤軍戦闘隊の幾多歴戦の勇士達が長距離攻撃の帰途夜間海上の悪天候のため錯覚に陥つて機位を失い、あたら仏印沖の海上に没した戦訓があるだけに、天候の悪化は今の私にとっては命取りであつた。次第に雲は厚さを増して拡がってきた。雲下を飛ぶ以外にはない。雲中に入れば台湾の山に激突する。高度を三〇〇mに下げて漸く雲下に這いこんだが、もう真つ暗である。何も識別出来ぬ計器さえ明るく見えるなら計器飛行も出来るが、今はそれさえ不可能だ。役に立たぬと思ひながらも前照燈を点じた。五〇m先も見えない。機体は不安定な飛行になつて、酔っぱらつたような足取

りを始めた。操縦桿を握る手が硬直して来た。

もう台湾の筈だ。いつ山肌が飛び出してくるか判らない。雨粒が風防に当り出したのは山際に近づいている証だ。目前に山が現われた瞬間急旋回をして間に合うかどうか？ 体が熱くなって額から汗が流れた。これが最後の試練だと心を励まして操縦桿を握る。少々雲が薄くなったのか、前方の視度がきき出した。これより悪くならないでくれ。突然目に映じた山肌！ 左へ垂直旋回。

助かつた。見覚のあるあの断崖、とうとう台湾に辿りついた。天候は悪くてもこの海岸線は我々の銀座だ。ぼんやり見える波打際に沿つて、一路南下する。断崖が終るころになつて、夜目に白くスコールが迫つて来た。終点真近かになつても迂回する気にはなれぬ。超低空で突入した。大粒の雨がバンバンと風防に当たつてくだける。花蓮港のそばまで来て四苦八苦の状態である。五分でこれを突破する。

なつかしい花蓮港平野。皮肉にも、幸運にも花蓮港上空は晴れである。飛行場の赤い限界燈がずらりとならんで私の着陸を待っていてくれるでわなないか。スベリー着陸燈は上空を照射して私を誘導している。感激に目がうるんだ。

「在天の英霊よ。私は今還つて来た。君達の勇敢な行動と功績を語り伝えることが出来るのだ。願わくは安らかに眠れ」

翼燈と前照燈を点じ、機体を大きく振つて帰還の合図をしながら滑走路の真上を突切つた。下では人影が右往左往している。場周径路をゆるやかに旋回しつつ着陸準備、車輪を出す。脚が完全に出たかどうかは見えないので、座席の青ランプと、翼の上から出る十cm位の指示棒を確認する仕組になつている。先刻よりランプは故障、棒を見ればこれも全然出ていない。―おや脚の故障か―
もう一度引つこめて車輪出しの操作をする。―やはりいけない。

敵弾にやられたらしい——事故記号の合図をして戦闘指揮所の前を超低空でふっ飛んだ。地上から車輪の状況を確認してもらうためである。然し地上からは何の信号も送ってくれない。拜むような気持ちでもう一度超低空をやった。相変わらずこちらの意図を判らぬらしい。このままでは着陸と同時に機体はこわれるが、燃料を考えると三度繰り返し気にはなれない。

折角ここまで無疵で帰って来たのに、自分の基地で飛行機を破損させるのが、情ないことになった。仕方がない。強行着陸あるのみ。

タンクは空だから火災の心配はあるまい。着陸経路に進入した。タラップを下げ、プロペラの回転をぐっとおとす。機体は着陸誘導燈に沿って、照明された滑走路に近づいた。——地上十m——青草が矢の様に流れる。火災予防のためスイッチを切った。爆音はハタと止んでプロペラはゆるやかに空転している。スベリー照明機が流れるように後方に去った。地上三m——失速直前である。スーと機体が沈む——

操縦桿を一杯に引いた。——不安と期待の一時——ゴロゴロという音が機体に伝った。おや、別にショックもなければ、プロペラも曲らない。走り続けている。なんだ車輪は出たのか。最後迄気をもませる。

ああ、とうとう着陸した。一度に全身の力が抜けて気が遠くなり、機体が止る前にガックリうつ伏せになってしまった。始動車に乗って馳せつけた機付班長が停止したばかりの飛行機の翼に飛び上って風防を開くや否やもの言わずに私の首にしがみついた。やっと思議を取り戻した。私が最初に発した言葉は「脚、脚」であった。機付長はげんな顔をしている。「脚だよ」私は翼の上を指した。

「ああ、この機の指示棒ははじめからこわれているのですよ」——こともなげに言った。——こん畜生、こっちの身にもなってみろ——

ピスト前まで地上滑走。機付がかけ上って来て、私の装備を外してくれた。よろめくように地上に降り立った私を、同僚のNが走り寄って来てしっかりと抱擁した。今日出撃の際五人並んだ位置に、私は唯一人直立して部隊長に対した。

「坂本編隊攻撃終了。特攻機は全機沖繩上空に進攻せるも熾烈な対空砲火のため二機撃墜さる。他の二機は十九時三十五分米艦船群に突入。中型艦二隻に夫々命中。日没と砲火のため遺憾ながら、戦果確認し得ず」

「御苦労じゃった。貴様の無線は沖繩上空から受信できた。ゆっくり休養せい」

部隊長の言葉も淡々としていた。だが相対する二人の心に、ひそむ共通する思いは、還らぬ若桜への愛惜の念であったろう。

報告が終るや否や対空無線班長が馳せつけてきた。

「聞えましたよ。然も沖繩上空からキャッチしました。素晴らしい空中状態でした」

時折発信した私のモールスが次第に感度が強くなるにつれ、欣喜したという。あるオンボロ無線機では、レコードだったらしい。

まだ私は休む所ではなかった。一同に抱き上げられるようにトラックに乗せられる。花蓮港の街を走り抜けて、通信隊へ送られた。台北の軍司令部へ直通電話である。今日見送りに来た参謀が、電話に出た。天候。敵情。進行状況。戦闘経過等々、情容赦もなく、三十分以上に亘る質問攻めである。それでも参謀に対してはまだファイトを持っていた。頑張り通して、ありのままを報告した。戦果確認の件に關しては吐りもしなかったが、報告が終って、御苦労とも言ってくれなかった。

なつかしい宿舎へ戻った。やれやれ解放されたと思ったのも束の間、私のニュースを聞いた、隣の飛行場に展開している三式戦闘機の部隊長が、深夜にも拘らず、特攻隊員十数名を引き連れて、待ちかまえていた。私の戦訓を聞くためである。紅顔の隊員達に囲れた私は、先程突入したばかりの四人の顔が思い出され、途切れがちな言葉に、聞き入る彼等の真剣なまなざしが、喰い入るように、私の視線とぶつかり合った。

命令一下、明日にでも突入せねばならぬ彼等は、如何なる思いで、還ったばかりの私を眺めたことだろう。

トマトジュース一杯で、一時間に亘る座談会をつとめねばならなかった。どうして寝台にもぐりこんだか覚ええない。

翌日。タブロイド版の台湾新聞に目を通して、驚いた。

私の戦果が大きく報道されている。

「軍司令部発表。中型艦二隻轟沈」

の見出しである。私はかきむしられる思いで、参謀の作った『轟沈』の記事を静かに、四人の遺品の前に捧げた。

—終—

